

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01167

研究課題名（和文）19世紀における地図製作者の系譜と作図法の継承・革新

研究課題名（英文）Genealogy of mapmakers and inheritance and innovation of drawing methods in the 19th century Japan

研究代表者

小野寺 淳（onodera, atsushi）

放送大学・茨城学習センター・特任教授

研究者番号：90204263

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀の日本は、江戸時代の測量・作図法から近代地図の製作へと転換した。本研究の目的は、青年期に江戸時代の測量や作図法を学び、明治期に近代地図製作も学んだ人々が、いかに地図製作を継承しつつ、転換していったのか、主に横山大観の父酒井捨彦と伯父宗孟賢を中心に、彼らの師弟関係や経歴、作製した日本図などから明らかにすることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで19世紀における日本の地図ならびに地図製作は、西欧の三角測量による近代測量図を対象とした地形図に関する研究が中心であった。近年では、地形図に加え海図に関する研究、一方で観光との関連で鳥観図に関する研究が行われている。しかし、江戸時代から地図製作に関わり、明治以降も民間の地図製作者が多くみられた。彼らに関する事例例、ならびに研究の切り口を示すことが、19世紀の日本において多くの地図製作が見られた理由を解明する糸口になるであろう。

研究成果の概要（英文）：Japan maps drawn in the 19th century converted to modern maps from the survey map and drawing figures in edo period. The purpose is to find out whether the surveying and drawing techniques learned when young were inherited or not. I mainly studied master-pupil relationship, career and maps created by Yokoyama Taikan's father Sakai Sutehiko and uncle's Sou takehiro.

研究分野：歴史地理学

キーワード：19世紀 地図製作者 日本図 酒井捨彦 宗孟賢 長久保赤水 水戸藩 系譜

1. 研究開始当初の背景

これまで、19世紀における日本の地図ならびに地図製作は、西欧の三角測量による近代測量図を対象とした地形図に関する研究が中心であった。近年では、地形図に加え海図に関する研究、一方で観光との関連で鳥観図に関する研究が行われている。しかし、江戸時代から地図製作に関わり、明治以降も民間の地図製作者が多くみられた。彼らに関する事例例、ならびに研究の切り口を示すことが、19世紀の日本において多くの地図製作が見られた理由を解明する糸口になるであろう。

2. 研究の目的

19世紀の日本は、江戸時代の測量・作図法から近代地図の製作へと転換した。本研究の目的は、青年期に江戸時代の測量や作図法を学び、明治期に近代地図製作も学んだ人々が、いかに地図製作を継承しつつ、転換していったのか、主に横山大観の父酒井捨彦と伯父宗孟賢を中心に、彼らの師弟関係や経歴などから明らかにすることである。

3. 研究の方法

製作者が判明する19世紀の地図をリストアップし、製作者の生涯を文献から明らかにし、彼らの相互の交流を解明していく。この交流図をもとに、彼らが作製した地図の相互の影響を地図ならびに古文書から調べる。この原本調査のために、所蔵機関へ伺って調査を実施した。茨城県内の所蔵機関はもとより、古地図資料を多く所蔵する神戸市立博物館、射水市新湊博物館のほか、北陸地方や中部地方の所蔵機関で資料収集を実施した。

4. 研究成果

18世紀から19世紀の日本は、盛んに地図の製作が行われた。その契機は江戸幕府が全国の諸大名に命じて作製させた江戸幕府撰国絵図編纂事業（川村博忠，1984，2000，2013ほか，小野寺淳・平井松午編，2021）である。手書き彩色の大型絵図として知られ、幕府は六十余州の国絵図をもとに日本図を作製させ、これを写した大名もあった。水戸徳川家の家臣となった長久保赤水は、確たる証拠が見出せないが、おそらく水戸徳川家の彰考館にあった江戸幕府撰日本図を見たであろう。彼は方眼に日本列島を位置付けた日本図をはじめ、風土記なども参考にし、「改正日本輿地路程全図」を作製し、大坂で刊行した。この木版手彩色図は、疑問を投げかけられれば、すぐに確かめて埋木で修正を繰り返し刊行された。赤水の地図に関する関心と地図製作の試みは、水戸藩において継承されていくことになる。まさに、水戸藩の地図製作は長久保赤水に始まるといっても過言ではない。

赤水没後も、水戸藩では学問所彰考館そして藩校弘道館を学問の場として地図製作者、地理学、地名学、天文学を志す者が現れ、明治期に教科用地図帳の製作で著名となる横山大観の父酒井捨彦と伯父宗孟寛まで継承されていく。江戸時代の終わりに、天文学や地図製作を若くして学んだ人々は、明治期になり西欧の三角測量が導入された時に、どのように対応し

たのであろうか。本研究では、江戸時代から明治期にかけての地図製作、その作図法の継承、あるいは革新について、各地域で活躍した地図製作者の代表的な事例として、長久保赤水の地図製作とその後の水戸藩士による地図製作の系譜を辿る。

赤水は「改正日本輿地路程全図」を完成させ、1783(天明3)年には「大清廣輿図」、1785年「改正地球万国全図」を刊行した。1786年には「大日本史 地理志」の編集に着手する。1789(寛政元)年には「唐土歴代州郡沿革地図」、「蝦夷之図」を完成させ、江戸の水戸藩上屋敷の赤水宅で、高山彦九郎、立原翠軒、藤田幽谷らと語り合う(長久保片雲,2011)。1793年に古川古松軒が赤水を再び訪ねるなど、赤水は交友関係を大切にしていた人柄であったことがわかる。1801(享和元)年、赤浜の松月亭にて85歳で死去。奇しくも、没後10日目に伊能忠敬が測量のため赤浜村を通り、墓参りをしたと伊能の『測量日記』に記録されている。

赤水図と称される「改正日本輿地路程全図」は1779年に作製、翌1780年春に大坂の書肆浅野弥兵衛から出版された。緯線には暦学の渋川春海の緯度測定値を反映した緯度が記載され、これに直行した経線が京都御所を基点として引かれた。日本人が出版した日本地図としては初めて経緯線が引かれた地図であり、緯線は伊能図と近似する。約130万分の1の小縮尺で、主要な地名と道が記載されている。木版手彩色であり、埋木による修正がしばしば行われ、古川古松軒や川村壽庵などから寄せられた情報によって、下北半島を鳶口型から斧型へ変更した。この例のようにして、安永版は13回部分修正されたことが指摘されている(海田俊一,2019)。赤水は1791(寛政3)年に「改正日本輿地路程全図」を再板している。この寛政版をシーボルトが持ち帰り、安永版を入手し、参考にしたことも知られている(松井洋子・レクイン＝フランク,2009)。安永版に比べると寛政版は小ぶりであり、主に海路の情報が新たに加わった。赤水没後も、1811(文化8)年には浅野弥兵衛と江戸の須原茂兵衛から、1833(天保4)年には大阪の4つの書肆が加わり、さらに1840年にも赤水図をもとにした模倣版が刊行され続けた(馬場章,2001)。

安永版の赤水図では下北半島の図形以外にも、利根川水系の流路、瀬戸内海の島々と干拓などにも修正が加えられている。なかでも下総国と常陸国の国境となる鬼怒川と小貝川の流路について、赤水は判断に苦慮していた。武士身分としては赤水より上であったため、門人の立原翠軒に宛てた赤水の書状「小貝川、鬼怒川の地理的疑問につき」(茨城県立歴史館所蔵立原家文書)では、丁寧に小貝川と鬼怒川の流路に関して翠軒に問い合わせている。このことが一つの契機か、水戸徳川家には幕府に提出した正保常陸国絵図の控え、ならびに寛文再提出図の控えが見出せなかったようで、正保常陸国絵図をベースにしたタテヨコ4分の1の模写本が数多く写されていく。石井智子によれば、全国で63鋪が現存するという(石井智子,2016)。以上のように、長久保赤水には彰考館と関わる水戸藩士の門人が複数おり、石川桃蹊のように地図や地名に関心を有した門人もいた。

一方で、水戸藩では鶴峯戊申に代表される地図・地名に関心を有する学者が召し抱えられている。豊後国臼杵城下の神官の家に生まれた鶴峯戊申は江戸に出て、1834年から翌年にかけて甲府、調布、桐生、足利、館林、佐野、日光、栃木、水戸などで講話した(久多羅木、

1935)。翌12月、戊申は鍋田三善の推挙で徳川齊昭の知遇を得る。磐城平藩江戸中老鍋田三善は「改正陸奥磐城四郡疆界路程全図」を著わした地図製作者としても知られ、藤田東湖や小宮山楓軒とも親交があった。戊申は1849年に下総国輿地全図、上総国輿地全図、安房国全図、相模国輿地全図、武蔵国輿地全図を刊行、翌10月水戸藩から扶持下賜、1856年12月69歳で水戸藩士に列された。1862年には常陸国全図、1868年に甲斐国全図を刊行した。神官であり、国学者であった鶴峯戊申は、仏教的世界観を受け容れず、近代科学としての蘭学系世界図を受容しつつも、日本図・国図を通して地図や地誌に強い関心を有していたと思われる。鶴峯戊申「日録」には、天保13年旧9月20日「同時酒井隠居市之丞殿訪来り暫物語有り」と記載される（藤原暹、1973）。隠居とは酒井喜昌であり、両者それぞれの影響のほどは不明であるが、戊申と酒井家は交流があったものと推測する。酒井喜昌の息子喜熙は、徳川齊昭の命で「皇国惣海岸図」を作成しており、水戸城下の須原屋安次郎より天保4年・8年には「関八州輿地路程全図」を刊行し、江戸後期から幕末における水戸藩随一の地図製作者となった。

赤水の門人立原翠軒には多くの門人がおり、地図製作者となる酒井喜熙もその一人であった。さらに、喜熙の5人の息子たちはいずれも地図製作に携わった（小野寺淳・石井智子・塚本麻文、2016）。長男は早世したが、5人の息子たちは弘道館で学び、やがて弘道館の戦いに関わり、明治初期は流転の日々を過ごした（寺門寿明、1991）。その後、次男喜雄は東京に出て時習義塾という製図の専門学校を経営した（齋藤敏夫、1977）。三男木下孟寛は陸軍参謀本部勤務、四男渋江信夫は陸軍参謀局地図課勤務した。1881年、参謀局地図課木村信卿課長らが清国の黄遵憲へ地図売り渡したとする事件が起こる。渋江信夫は刑務所で自決した。明治のシーボルト事件と称される黄遵憲事件は、酒井家の兄弟の人生に大きな変化をもたらした。次男喜雄は製図塾の経営を辞めた（齋藤敏夫、1977）。

黄遵憲事件後、酒井捨彦は旧岩村藩主松平乗命邸の地内で、湯島天満宮界隈の家屋に一家で転居した。この頃から版元小林喜右衛門との関係を深め、下総国、上野国、常陸国、下野国、相模国、武蔵国の国図を出版する。幕末に刊行された鶴峯戊申の国図を継承し、画工結城正明による銅板の国図を刊行した。これら国図は1899年3月の府県制改正の前年まで刊行され続ける。このように府県制改正まで、国図の需要は高かったことが明らかである。

正確な国図のほか、捨彦は早くから伊能図の存在を知っていたと想定される。酒井喜員名で1870年に水戸下市の須原屋安次郎から刊行した「校正陸奥分国三州全図」には、「伊能某」の日本図を参考にしたことが明記されている。後年、捨彦の子横山大観は、生家には伊能図が多くあったことを記憶し、その自叙伝に記載しているほどである（横山大観、1926）。小林喜右衛門から、捨彦は「新撰萬国全図」「大日本全図」など教科用地図帳も刊行した。「新案萬国地図」はJohnston alexander keith 著の地図帳を原著とし、「校用日本新図」や「校用萬国新図」は小林喜右衛門・柳原友吉から刊行した。これらの教科用地図帳に掲載された日本図は、伊能図をもとにしたと考えられる。小林喜右衛門以外の書肆からも、日本図・府県分国図・学校教育用・旅行案内・中国の歴史地図帳「歴代地理沿革図」（銅板図）など

を刊行した。やがて、酒井捨彦は教科用地図帳の製作を中心に行い、生計を立てるようになる（小野寺淳・石井智子・塚本麻文，2016）。

黄遵憲事件後、三男木下孟寛は大阪府西成郡北野村 278 番地に転居し、宗孟寛と改名した。1894 年 4 月 12 日（17 日に訂正貼紙あり）には「教科用書萬国新地図」を発行し、教科用地図帳の製作にかかわる。「教科用書萬国新地図」の「萬国地理統計表」の表紙には、第三高等中学教授大伊利久校閲、製図技師宗孟寛、著者松本謙堂と記載される。大阪では石板印刷を導入した中村芳松（中村鐘美堂）が地図帳を発行した（船杉力修，2017）。国定教科書以前の地図帳には編者・作図者が記載されることが多く、酒井捨彦と宗孟寛が作図した学校用地図帳は、その代表である。さらなる調査が必要であるが、酒井捨彦作図の「校用日本新図」は少なくとも 20 版、宗孟寛作図の「教科用萬国新地図」も少なくとも 19 版を確認できる。文部省教科書検定制度が施行される以前の教科用地図帳は、酒井兄弟、すなわち横山大観の父と伯父が深く関わっていたことが明らかになった（小野寺淳ほか，2020）。

近年では、小林茂ほか編『鎖国時代 海を渡った日本図』（2019）による詳細な研究によって提示されたように、長久保赤水「改正日本輿地路程全図」が欧米に与えた影響は大きい。同様に、国内における地図作成に与えた影響もまた大きかったのではないかと推測される。雑駁ではあるが、本報告では 1890 年代末までに至る日本図や国図刊行の出発点として、長久保赤水「改正日本輿地路程全図」の刊行を位置付けることができることを指摘した。また、これを継承したのは、旧水戸藩の地図製作者たちであった点が興味深い。赤水が蒔いた日本列島を経緯線上に位置づけ、詳細な地名を記した実用的な刊行日本図の種は、伊能忠敬や鶴峯戊申の地図作成との出会いのなかで、旧水戸藩士たち、なかでも酒井捨彦と無名の優れた画工たちによって 19 世紀末まで地図製作が継承されてきたといえるのではないか。

< 付記 >

本科研の研究成果の多くは、2021 年度日本地図学会定期大会の報告内容「長久保赤水 - 水戸藩地図製作の系譜の中で -」（要旨：地図 59-4，2021 年掲載）、2022 年度印刷博物館『図録 地図と印刷』収録「講演 水戸藩地図製作者の系譜 - 長久保赤水から横山大観の父と伯父 -」（2022 年 11 月刊）、2023 年度歴史地理学会大会公開講演会「水戸藩の地図製作者たち 伊能図との関わりを中心に -」（要旨：歴史地理学 65-3，2023 年掲載）、東京新聞連載「日本図の変遷 - 赤水から伊能へ」（2022 年 10 月～12 月、平井松午氏との分担執筆）で公表した。2017 年度国土地理協会助成金「明治期における民間地図製作技術の継承と革新 - 酒井捨彦をめぐる民間地図製作者とその地図に関する研究 -」（研究代表者：小野寺淳）、ならびに 2018～2022 年度科学研究費基盤研究(A)「伊能図の成立過程に関する学際的研究 - 忠敬没後 200 年目の地図学史的検証 -」（研究代表者：平井松午，課題番号 18H03603）の一部を使用させていただいたことを付記する。現地での原本調査・史資料の収集では、長久保赤水顕彰会会長の佐川春久氏、徳島大学名誉教授平井松午氏、佛教大学教授塚本章宏氏、射水市新湊博物館の野積正吉氏、兼岡真子氏、神戸市立博物館の小野田一幸氏、永山末沙希氏をはじめ、多くの方々にお世話になった。なお、本文中のカッコ内に参考文献の著者と出版年を示したが、概要の字数の関係で、参考文献名の記載は省略させていただいた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山口和泉・小野寺淳	4. 巻 22
2. 論文標題 水戸藩天保改革における「新屋敷」の開設と内部構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城地理	6. 最初と最後の頁 31 - 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口和泉・小野寺淳
2. 発表標題 水戸藩天保改革における「新屋敷」の開設とその変化
3. 学会等名 日本地図学会2021年度定期大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野寺淳
2. 発表標題 長久保赤水 - 水戸藩地図製作の系譜の中で -
3. 学会等名 日本地図学会2021年度定期大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野寺淳
2. 発表標題 国学者鶴峯戊申の国図作成について
3. 学会等名 国絵図研究会第45回秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野寺淳
2. 発表標題 水戸藩の地図製作者たち 伊能図との関わりを中心に -
3. 学会等名 歴史地理学会66回大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------